IOJだより　第５７号　2012年12月3発行

NPO法人-IOJ
日本の将来を考える会
http://ioj-japan.com/xoops/

コラム 黙ってはいられない；

卒原発の嘉田新党は小沢氏の傀儡か
－チルドレン達を救うために日本の将来を犠牲にするのか－

１．陣笠代議士と劣化した議員

陣笠代議士とは懐かしい言葉である。今は誰も言わなくなったが、どこかの派閥に属する一政治家だと思えばイメージがはっきりする。インターネットによれば、スケールが大きい国政案件を提案したり、自分自身から行動を働きかけることはせず、地元選挙区の陳情などで自分の利害に直接関係することだけを大物政治家を通して実現し、その後の選挙で当選し続けることのみを目標としている代議士のこと。

こう思ってすぐに連想するのは、小沢チルドレンである。この議員たちは民主党がマニフェスト欺瞞で３００議席あまりを勝ち取った時１年生議員になった人たち。当時、マスコミに顔を知られ、民主党から出れば誰でも当選する“雰囲気”だったから、議員としての能力や適格性は問題にならなかった。ところが、鳩山・菅と続き民主党の失政が顕著になって矛盾が露呈し党内対決が顕在化すると、消費税問題を契機に彼らの多くは小沢氏と一緒に民主党を飛び出した。地盤と交付金もなく、そのままだと落選の可能性の高い議員である。この人たちは地元にさしたる利益還元をしたわけでもないので、陣笠代議士以下とみられても仕方がない。問題は、彼らは当選を目指して死に物狂いで活路を見出そうとしており、何が何でも反・脱原発にすがろうとしていることである。この行動パターンは、みんなの党、民社党、緑の風などにも共通する。信念を持って国民を説得すべき立場にありながら有権者に迎合するのみ。ひと頃の議員に比べ劣化は著しいという印象をぬぐえない。

国会議員は大変だと思う。受かれば“議員先生”、落ちればただの人、万単位の票。こういう困難を乗り越えて生き延びて行かなければならない。しかし選挙区の利益と国益に資することが基本。是非有権者が納得する“志”を涵養して欲しいものである。

２．安全性に対する国会議員の理解度

ところで、嘉田氏は運転再開の容認・非容認に関して揺れており、記者たちに弁明している。その記事を読んで、この氏の原発安全の技術的側面の“理解度”はゼロではないかと思わざるを得なかった。国会議員は技術者ではないので原子力技術の本質は判らない。津波対策をとった今どれでだけ原発の安全性が高まったか、判断できない。そういう議員たちが危険だ、危険だと騒いでいる。そのことは政治的メッセージとして結構だと思うが、もう少し“原子力村の一流の専門家”に真実を聞いたらどうだろうか。“村”以外の専門家と思われている有識者の意見だけだとやがてぼろが出るであろう。

今、原子力関係者を“原子力村以外の人”から選ぶという愚かな排除基準を朝日、毎日、東京新聞などのマスコミが作り上げたおかげで、うまく行くはずのものが円滑に行っていない。正確な情報が議員に届いていないので、現実離れした幻想を語らざるを得ない。“村の人”を排除することを原則とした民主党、それを誘導した一部マスコミ、現在日本にはこのような排除論理に起因する矛盾が横行している。この矛盾は必ず将来に災いする。日本では原子力技術とその安全性を最もよく知っているのは電気事業者である。彼らを排除した民主党、また排除している先ほどの報道関係者は本当に愚かだと思う。国民はこのような事実を明確に知る必要がある。

３．アッと驚く「嘉田新党」

「アッと驚く為五郎」は約４０年前にハナ肇がテレビでギャグって大きな話題を呼んだキャッチフレーズである。何か、期待していなかったびっくりするようなことが起きた時発する表現である。「嘉田新党」の結党が突然公表されたとき真っ先に感じたのはこの表現である。驚いた理由は、

１)背後で小沢氏が仕掛けて実現したこと、しかも自分は表に出ない（役員にならない）といういつもの狡猾な政治手法に嘉田知事がトラップされた事実。

２)あの飯田哲也氏が代表代行となっていたこと。この人は、自然エネルギーの幻想を、原発の代替として撒き散らした人物。一時橋下氏のブレーンになり、理由は判らないが疎遠になり、橋下氏と対立関係にある嘉田知事の代表代行となった。今日の新聞で橋下氏はこれを強烈に批判していた。

３)嘉田氏ほどの人が、原子力なしにこの国が立ち行くと思っておられるとは何かがおかしい。昨日（平成24年12月1日）の読売テレビ番組で嘉田氏は安全基準を満たした原発は再稼働を認めると発言したそうだが、そうなると「嘉田新党」はたちまち自滅するから、今朝の新聞では打ち消しに躍起となっているという。思わず本音が出たのか。要するに反原発を選挙に勝つ手段としてだけ見ているということだろう。やがて小沢氏にしてやられ、気が付いた時には原発を滅茶苦茶にして終わるだけではないだろうか。

４)嘉田新党は脱原発の代わりに“卒原発”を打ち出した。10年で実行するという。橋下氏は彼らより一枚も二枚

も上手のような気がする。彼は云う、少数政党の脱原発主張は情緒的でシミュレーションも行っておらず実現性がない、と。その通りだと思う。昔、政権にありつけない野党ができもしない公約を毎回掲げたのと同じパターンだろう。政権にありついた民主党の、野党時代と政権獲得後のちぐはぐな行動を見れば矛盾は一目瞭然。

運転再開はないとすると、毎年３～４兆円が海外に流失。10年間で35兆円の流出。子供手当ぐらい原発を再開するだけで出る。やがて、軒並み電気料金が上がる。企業は倒産し生き伸びるため海外に逃げていく。雇用も減少し、若者の就職もない。非行は増えるだろう。こんな非合理がどうして判らないのだろう。若者よ、原発は十分な安全対策をとったから安全性は著しく高まった。世界は400基の原発を動かしている。それ故誰が「事故は、起きる、起きる」と煽っているかを見抜いてもらいたい。

４．「全員一致の議決は無効」という真理

「全員一致の議決は無効」はイスラエル教の箴言（格言）である。日本でいう“根回し”がなければ、ある政治問題の決定に全員一致ということはあり得ない、というものである。全員が一致するということは全員が間違っていることを意味する。意見は本質的に十人十色であり、全員が妥協しなければ全員一致はあり得ない。全員一致の決定が見られたときは、不自然なことが背後にあると思うべき。これは人類共通の普遍的真理である。福島だけを見て反・脱原発に走る今の状況は「全員一致の議決」に近い。

この状況を理解しこれにまともに対応しているのは、自民党の安倍氏と石破氏と維新の石原氏と橋下氏だけではないか。嘉田氏はこれを正しく理解しないで、手段を選ばない小沢氏の「選挙がすべて」の論理に捕まった。小沢氏がすごいというか、嘉田氏が甘いというか。前途に破綻が待っているのは自明だろう。民主党に懲りた私たちは、チルドレン達を救うために日本の将来を犠牲にする余裕はない。

逆に、どういう考えが正常で異常かを見分ける良い方法は「全員一致の議決」の内容を見ることである。現在の脱原発はそれに近い。

天秤の一方の皿には“安心”という幻想と“運転再開の可否”いう現実だけが乗っている。他方の皿には、１０年で３５兆円の国富の流失、電気料金の値上げ、ホルムズ海峡が封鎖されたときの日本の立ち往生、産業が被る致命的な痛手と海外移転、雇用の喪失、などが乗っている。運転再開がなければ、天秤はとても平衡を維持できない。運転再開なしの安心側を支えてやるには、国民の熱病と国民の支持が少ない政党とそれに属する信念の希薄な議員候補達を必要とする。これがやがて「破綻をきたすであろう」今のバランスの実態である。

最後に言いたい。“空気”に支配され易い“国民性”が原発問題の正常化に立ちふさがっている。原発推進は禁句にされている。西洋では、「全員一致の議決」にはならず、仮にそうなったとしたら、それは皆が熱病にでも冒されていて判断力がまともでない状態にあったか、“空気”の金縛りに合って硬直的状態になっていたかと理解され、日を改め再度採決する。

“空気”に水を差し問題解決を図る必要があるが、一つは先の天秤のアンバランスを解決すること。もう一つは、３５兆円の有効利用。例えば、福島の復興に当てれば、閉塞状態にある現状が一挙に変わる、事故は起こしたけれどそれに負けなかった、という明るい未来につなげることができる。嘉田新党の「日本の未来」では「日本の暗黒」が待っているとしか思えない。

５．脱原発の神聖化は何も生まない

ところで、読者は気が付いておられるだろうか。日本には禁句が多いことを。言葉が禁句になることは、言葉を神棚にあげ人々の議論を封じることである。こうなるとどうなるか。反論はもとより正論も許されない。反論を許さないという“空気”ができてしまう。日本人はたとえそう思っていても、一生を棒に振るくらいの覚悟をしないとこの“空気”に逆らうことができない。

神聖化されている言葉を挙げると、核兵器廃絶、原爆、核武装、放射能汚染と被曝、原発、部落民、憲法改正、軍国主義、武器輸出、　・・・である。正面から公に議論することは忌避される。議論の途中で憲法改正を口にでもしようものなら、戦前に戻ろうというのか、と脅かされ返す言葉がなくなる。国際的に通用しない日本人の欠点である。

原子力に関して、脱原発は立派な禁句であり、神聖化されており、それに抗することは簡単ではない。この心理が「全員一致の議決は無効」という心理と共通していることは推測できる。“空気”によって作られた「全員一致の議決」と日本的根回しによって作られた「全員一致の議決」は、結果は同じでも生成過程がまるで異なる。後者には議論の形跡が存在するが、前者は踏み絵的で問答無用である。

国民は日本人が“空気”に弱いという弱点を知っている。しかし、それに“水”を指す方法を知らない。先ほどの天秤で国民の過剰な“安心の希求”に“水”を指すのは大変困難である。“空気”はそれほど強いのである。脱原発の例で判るように、日本の将来はこの“空気”とそれに差す“水”に大きな影響を受けることだけは明白。戦前、太平洋戦争を防げなかった二の舞を避けるためにも、“空気”に“水”をしっかり注ぐ努力は継続したい。その良い例が来たる“衆議院選挙”である。